

# 裾野市の紹介

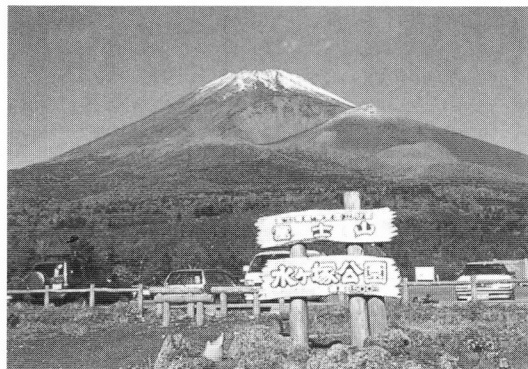
沼津地区 榊原 幹雄

現在裾野市の人口は五四、五一三人（平成二十三年十一月現在）珠算教室を経営している全珠連会員は現沼津地区長の萱間先生と全珠連検定部の江藤先生の二名ですが過去には五名の時もありません。

裾野市は沼津と御殿場の中間の位置にあり、富士山と箱根の山々と愛鷹連山の山裾にあり緑豊かな街であります。

天下の名山、富士山は数千年前の海底火山噴出物を基盤に幾度も噴火と堆積をくり返し形成された三層構造のコニーデ式火山として、日本一の山と謳われる富士、その富士

の「裾野」という名の街は、文字通り富士が生み育てた街と言えるのではないのでしょうか。三六五日その山を見続ける裾野市民は天下の果報者であり、一人ひとりが「これぞ富士」という絶景の場所と想い出を持っていきます。富士の四季などという大振りな区分では決して表現できない富士の魅力をもつ街で



す。

裾野市の旧跡を見てみると遠い昔から途絶えることなく、くり返されて来た人の営み、人の歴史かつてそこに確かにあった人々の足跡が残され今も残る先人の知恵「深良用水」を始め、ひとつひとつの場所に裾野ならではの「時」が息づいています。少し長文になりますが深良用水について述べてみます。今から凡そ三四〇年前のことである。深良の名主大庭源之丞は今日も家の前の庭先に立って湖尻峠を見上げていた。

箱根の山々は青空の中に聳えていた。あの山の向うに湖がある。又しても思いはその事に走る。満々と湛えた芦ノ湖の青い水（あの水が引けたら……）とは、この辺の百姓達の総て願ひであった。あの水さえ引ければ何百町歩もの荒地はすぐにも立派な田になるものを……とは村人が寄ればいつもすぐに口に出る話である。幕府は全国的に新田開発を奨励していた。

荒地を自費で開発した者にはその土地を只でくれるという最も魅力的な条件であった。新田開発は勘定奉行所がしていたから有能な土木業者は続々と江戸に集まり一代で産をなし子孫長久の基を築いた。源之丞はどこそこでも新田を開発したという話を聞いて今こそ好機到来とばかり近回りの名主に集まってもらい年来の希望を打ち明けた。名主たちも水を引きたいという願望には誰も異存はなかった。あそこから水を引くには山を掘り抜かにならん、費用も大変だが第一やれる人が居るだろうか。江戸にいつてその道の人を探せば見つからんでもあるまいと俺は思う。「昔から芦ノ湖の水は権現様お手洗いの水といてて関所の役人でせえ入ることが出来んちゅうのにその水を分けてもらえんべえか。」これらの事については当たって砕けろで源之丞は江戸に出て、しばらく滞在し方々の評判を聞いているうちに、浅草の友野与右衛門が国も同じ駿河の人で一番の適任者であることを知った。深良用水は神奈川県芦ノ湖から静岡県側へ流すため一六六六年（寛文六年）から一六七〇年（寛文十年）湖尻峠の下裾野市深良にかけて掘られた隧道である。芦ノ湖の比西岸に用水の取入口があり、この用水は駿河国駿東郡深良村の名主、大庭源之丞が幕府の許可をえて、箱根権現の別当、快長の理解と江戸浅草の商人、友野与

右衛門の協力を得て完成したと言われています。



費用は当時の金にして七千余両、米に換算すると十萬石相当と計算され、一石四萬五千円とすると現在の金にして四十五億円となります。この大資本を投じたのは与右衛門の養父、駿府の友野座と云って駿府第一の豪商であり資金の心配はなさそうだし、その上友野家は甲州（山梨県）流、土木の法が家伝となつて伝わり方々の新田を開いて当代きつての腕利きで七代目の友野与左衛門長在でありました。

箱根用水に投下した十萬石相当の資金を何年で回収出来る計画であったかという点、その時の差入証等にある条件によつて試みに計算してみると大体三十年後に元金を回収することになります。

元文五年の水配源蔵の日記によると千石年貢を出してあるから半公半民として小作人との配分を考え毎年二千石の地行取りになる訳で、ここで与右衛門が乾坤一擲の勝負にかかった事が理解されます。工事は駿河側と芦ノ湖側により進められ出合いは一米程度の誤